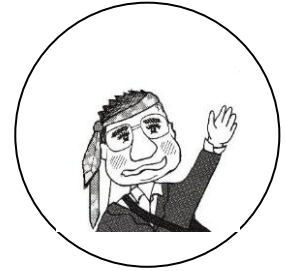


大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

大物政治家 vs ^{だいほうてん}大宝天のカレー合戦 (2)

辛島昇の妻貴子の『わたしたちのインド』を読んで感動したことがあった。貴子さんはインドに住むなら「ケーララ」と言っていた。ケーララは裕福な州である。それで乞食がない、と地元の人が出た。でも、わが輩は乞食を見た。

「あれは隣のタミル州や、北東の貧しいビハール州から出稼ぎにきた乞食だよ」

と地元の人が解説してくれた。ビハールならあり得るが、タミルから来るだろうか、と疑問に思った。ケーララとタミルはお隣さん対抗心があるのかしら、などと思い浮かべた。

ケーララはアラビア海に面し、内陸には西ガート山脈がそびえ、モンスーンの季節になると大量の雨を平地にもたらす。それが緑豊かな土地に育む。西ガート山脈には、補陀落山信仰由来のポディイル山がそびえている。那智（和歌山）とケーララ州は補陀落山信仰でつながっている。山脈に入ると、樹木につる性の植物胡椒が巻き付いている光景をみることができる。胡椒の実を収穫して天日で乾燥させるのだが、近年は労働者不足だという園主の嘆きを聞いた。低賃金では労働者が集まらない。

胡椒は英語でペッパー (pepper) だが、この語源はサンスクリット語のピッパリー (Pippali) だとされている。しかし、これはインド・ナガコショウ (和名：ヒハツ) のことで、ケーララの胡椒とは別種のものである。紀元前四世紀にアレキサンダー大王がインドからギリシャにもたらした。ギリシャ語のピッパリーが転化してペッパーになった。

ケーララの胡椒は中南米産よりもピリッと辛い。この辛さが刺激的なのである。ローマ帝国は胡椒輸入で金貨の流失を招き嘆いたという話がある。

あるとき、立ち飲み「肴や」の店主にお土産で胡椒をあげた。ポテトサラダや肉などに振りかけるとピリッと辛いので大好評であった。サラダにかければ減塩の代替にもなる。

西ガート山脈はカルダモンの栽培が盛んである。カルダモンはチャイにも用いるが、カレーにとっても重要な香辛料である。クローブ (丁子) も同じく盛んである。

1970年代ラーメーシュワラム港(インド)/タライマンナール港(スリランカ)間のフェリーが就航していた。ランカでクローブを購入し、インドで売れば差額で船代が浮くという話があった。ランカの方が安かったのであろう。

ケーララやスリランカは、スパイス王国であった。紀元1～3世紀に南インドとローマ帝国間で貿易が盛んであった。その貿易港の一つがコチ（コーチン）であった。ローマ帝国以前、紀元前3000年ほど前からシュメール、アラブ、エジプトなどへの香辛料の輸出地であったとも云われている。古い時代から良い香辛料が集まる貿易港である。それで、りき丸に入手を頼んだ次第である。わが輩も入手できたが、品質としてはりき丸入手のものがはるかに良かった。

コチはいわば国際貿易港で、四つの地区に別れている。マッタンチェリー地区とフォート・コーチン地区は歴史的遺産が多い。キリスト教十二使徒のセント・トーマスがやって来たという伝説がある。単なる伝説だという人もいるが、国際貿易港としては有り得ない話でもない。ケーララには古い時代からのクリスチャンが多い。

在日インド大使館のシビ・ジョージ大使と霊山寺（奈良）で会食したとき、彼がシリアン・クリスチャンだと聞いた。わが輩が長らく調査をしている謎の留学生マラヤール・ポータン・クリヤンも、シリアン・クリスチャンである。大使に質問してシリアン・クリスチャンだと確認できた。ポータンは聖ポール＝パウロのことである。

大使が鳥取県庁を表敬訪問したとき、大宝天も歓迎会に出席していた。先年大宝天夫妻とわが夫婦の四名はケーララを訪問したことがある。そこで大宝天はケーララ州の具体的な話をしようと構えていた。ところが、某重鎮が宗教やカーストなどの基礎的な質問をしたものだから時間切れになったしまった。中学生程度の会話で終わってしまった。それで大宝天は「怒髪天」となってしまった。「わしが折角有意義な話をしようと思ったのに、どうでもよい話で終わってしまった！」

また、少数だがユダヤ教徒もいる。聖堂シナゴグもある。イスラエル建国に際して殆どが移住してしまった。わが輩の友人（ヒンドゥー教）の親戚（姉の嫁ぎ先）はユダヤ教徒で、西部のラージコートに住んでいる。コチから移住したのか、別ルートで辿り着いたのか、聞き洩らした。

7世紀にイスラム教が成立し、イスラム商人がコチにやって来て住むようになった。その「一部の者は、西ガート山麓でコーヒーの栽培をおこなったともいわれている」と辛島は述べている。

この解説に若干補足したい。

バーバー・ブダンは、17世紀頃のスーフィー派（イスラム神秘主義）の行者であった。彼は、1600年頃メッカに巡礼に行った。その時、コーヒーの香りに魅惑されイエメンのモカ港から7粒のコーヒーの豆を密輸した。彼は7粒の豆を僧衣の折り返しの手拭に忍ばせて持ち帰った。チックマーガール近郊のブダンギリ丘陵に植えた。ここよりマイソールやニルギリに広がった。英国が栽培に関与する250年以上前のことであった。

イスラムの行者ブダンが植えたことは確かなようだが、それを広めたのはイスラム教徒だけではなくヒンドゥー教の零細農民の栽培によるもの、とわが輩は考えている。なぜなら、スーフィー派の行者はイスラムのみならずヒンドゥーからも崇拝されていたからである。

とにかく、南インドに行ったら「コーヒーを味わって！」と、わが輩は言っている。

帰国後、わが輩はカレー粉（ガラム・マサラ）などの香辛料を大宝天に送った。それは石破茂前総理の事務所に届けられた。石破さんはどんなカレーをどんな人に振舞うのだろうかなどと夢想しながら梱包した。一度は食べてみたいものだと思った。これで、わが輩の任務は終わった。

六月に、再び大宝天から電話がはいった。

「エライことになった！」

もしかして、カレーを食べた石破茂前総理が下痢をしたのか、それとも、なにかトンデモナイことが起きたのか、今回はその話をしよう。